

「出会い・かかわり・学び～もうひとつの人間関係原論」



中野 清 (なかの・きよし)

- 1949 千葉県に生まれる。
 - 1979 上智大学で中世思想を中心に学び、大学院哲学研究科博士後期課程満期退学。
 - 1980 南山短期大学人間関係科講師就任し、哲学系の基礎論・人間論を担当。また他の領域の教員とともに現代社会と人間、カウンセリング的対話なども担当する。
 - 1987 独ミュンヘン大学カトリック神学部グループマン研究所客員研究員。
 - 1995 南山短期大学人間関係科教授（現在に至る）。
- 著書：『告白録』におけるアウグスティヌスの神探求の道
「体験学習」を哲学するー体験と知とコトバー
「都市の賑わい」ー地下街を読むー
「人格と行為」ーガブリエル・マルセルの論文を読むーなど

中村：例年は外部からの講師で研究会を行っていますが、教員合宿の中での話し合いで、人間関係科の教育の中で身近に考えてみるのが大事だろうということで行うことにしました。話題提供半分、質疑応答、質疑というよりも、話題に対してどんなふうに考えるかを出してもらいながら、人間関係原論や、人間関係から学ぶとはどういうことかなどを考えられるといいなと思います。

中野：今日の話の流れを概要をプリント〈資料1〉に作ってみました。きっと穴だらけの話なので、皆さんがその穴に一度はまってもらい、そこからみんなして抜け出せると、いろいろなアイデアが出てくるとと思いますので、よろしくはまってみてください。

タイトルの「出会い・かかわり・学び」という3つのコトバがどのようにつながっていくのかということ、今日お話したいと思っています。「出会い」も「かかわり」も「学び」も、人間関係科の授業では、学生もスタッフもいろいろな形でたくさん使っているコトバです。その意味で人間関係科の日常語がありますが、また様々な授業の根幹にあるコトバではないかと思えます。それについて、普段気づいていることを少しまとめてみようというのが今日話の主眼です。

副題に「もうひとつの人間関係原論」と付けました。人間関係原論は、みなさんご存知のように、人間関係科の入学から卒業まで連続して続く必修科目です。1学年全員が4人の担当スタッフとともに2年間かけてつくりあげる人間関係科のもっとも人間関係科らしい大事な授業のひとつだと思います。また、

「もうひとつの人間関係原論」という副題で、わざわざ「もうひとつの」としたのは、「原論」と名づけられているのですから、この授業には私が考えている以上にもっとがっちりした何かがありそうな予感がしているのですが、自分が普段考えていることはそれとはいつもちょっとずれているんじゃないかという気がしていて「もうひとつの」とした次第です……。結構謙遜してつけました。

3つのコトバの関連を検討するのは何のためかということ、人間関係科の教育とか学習の基礎的概念を検討していくのが、私の大事な仕事だと思っているからです。そこで人関の中で、創設当初から言われている言葉を2つ取り上げてみます。一つは人間関係科の学習の基本的な方法である「体験学習」。体験から学ぶということ。人関では体験というのを授業、学習の場面で、また話をしていく中でもすごく重視している。体験を重視する主眼はどこにあるのか？を検討したい。もうひとつは、人関では何を学ぶのか？という問題。当然のこととして人関では「人間関係」を学ぶ。人間関係を学ぶといっても、特定の既存の理論などを講義や実習で教えるというよりも、むしろ学び方を学ぶのだという言い方がされます。「学び方を学ぶ」とはどういうことか？これにも触れられたらいいなと思っていますが、この2つの大テーマは、さきほど言った私の大穴にまずはまってから、後半の質疑の時間にみんなで意見を出し合う形で答えがさがれるといいなと思っています。皆さん自身にも考えていただいて、お互いの体験学習観を吟味しあえたらと思っています。

今日の話のきっかけとなっている、「人間関係原論」という授業を、今年は山本研究員を含めると5人のスタッフでやっています。星野、津村、グラビア、私と山本さんの5人です。

授業の今年の「ねらい」は2つです。ひとつは「124人と出会う。」124という数は、参加学生とスタッフを合わせた数です。お互い何らかの形で出会ってみよう。そこから何か生まれるだろうという、予感を込めながら立てられたものです。すでに顔見知りであるあるいは親しい間柄の人もいるいわば仲間どうしであるにもかかわらず、あえて「出会う」というところにひとつのミッションがあるかも知れません。二つ目のねらいは「自分をいかす、相手をいかす」です。少し固く言うと、個と全体との関係。個人個人が自分であって、自分の能力・才能・興味をその都度ごとにいかし、そして相手をもちかすということ。そういう自分と相手とがともに活かしあえる共同の場がどうすればできるのか？という課題です。これは、人間関係科が昔から強調していた、学習共同体、ラーニングコミュニティといいますが、その在り方を模索すること自体が、まさに人間関係を学んでいくことであり、さらに言えば、人間関係を学ぶための学び方を学ぶ体験学習なのだという期待の下に行ってきたことだと思います。

「自分をいかす、相手をいかす」というのは、言葉としては単純でスーッと抵抗感なく入ってくることはなんですけど、考えてみると非常に難しい問題をいきなり提起しているとも言えます。課題に取り組もうとすると学生はただちに問題の困難さにつきあたります。自分が自分であって、あるいは自分らしくあろうとすると、簡単には相手の人をいかすことにつながってこない。時には衝突する。自分をいかしながら同時に相手をいかす、相手をいかしながら同時に自分をいかす。他の人と一緒の場でそれをやると、両立しないのではないか、自分と他者と両方ともがうまくいさせる場とか、やり方は理想に過ぎないのではないかという思いが非常に強くできます。でもこの問題は、この社会がより人間的に生きやすくなっていくためには、やはり共同の場、契機がどこかで作り出されそれが保障されていかないといけない、人類が永遠に追求すべき大事な問題のひとつでもあるわけですから大問題です。それを1年生の始めから取り組もうとするのですから、学生に困惑が生まれるのも当然です。しかし人と人がかかわるかぎり避けて通れない根本的課題ですから、「人間関係原論」であるかぎり、そうした問題に私たちも立ち向かっていこうという思いでスタートしたわけです。これまで1年間授業をやってきましたが、2年次の授業でもこのねらいは続くだろうと思っています。

今期、1年後期の授業ではテーマ名に「かかわることと学ぶことをめぐって」とつけました。とりわけ「学ぶ」をつけ加えたことで、学生自身のこれまでの学習体験も含めて、今人間関係科でやっている学び方に目を向けてみようという趣旨です。最初の授業では、それぞれの人が「学ぶ」ということについてどんなことをイメージするか、「学びの風景」のタイトルで表現して各人のイメージをさぐるための6回の授業をしました。1番バッテリーとして、中野自身がどんな風に「学び」をイメージしているかを話せということになって後期の初めに話をしました。今日の話は、その時学生を前に話したことが主です。

それでは、その日の授業記録<資料2>をちょっと見てください。(以下、「」の文が記録文です)

授業記録は山本さんが記録してくれたものです。どんな感じで授業が進んだか、原論の授業の雰囲気味わってもらいながら一緒に見ていきたいと思いません。

10:30 ジャーナル返却

——いつも最初に前週に学生が書いた授業のふりかえりに相当する「ジャーナル」を返却するところからスタートします。

10:45 ジャーナルへのコメント(グラバア)

「先週はツンツンとグラバアのためにハッピーバースデイの歌をうたってくれてありがとうございました。わたしがうれしかったのは声を出して皆で皆で

うたってくれた事です。グラバアが歌った歌の詩は、後ろに置いておきますので帰りにもって行ってください。次週やることの予告をして欲しいという要望があるようですが、スタッフミーティングをして次週の計画を立てる関係で今はできませんが、努力します。」

——ジャーナルに対するコメントをグラバア先生が話しました。丁寧に読むとおもしろいんですが、今日は割愛します。

10:56 私の学びの風景（中野）「出会い・かかわり・学び」

「今日は学ぶとはなにかを考えてみたい。時間管理ができませんので、30分経ったらお知らせください。」

——と前にいる学生に言ったんです。すると授業後の学生のジャーナルに「教師が自分で時間管理ができないからと、学生に助けを求めるとはけしからん。」とお叱りのコメントが入ってしまして……。しかし皆さんご安心ください。その学生とは今は非常に良好な関係です（笑）。

11:00

「話の本題に入ります。『出会い・かかわり・学び』について話します。これは原論の中で話してきたことです。「出会う」ことは原論の中で大切にしたいです。「私をいかす、相手をいかす」というねらいもある。今日の話しの方向性を示します。「出会いとかかわりが媒介する学び」——これは黒板に書きました——もうひとつ本日の目玉。それが「私」中野自身にもたらしてくれる変化。「私が変わること」が学びにとって大切なことだ。キーワードを示します。『学ぶ＝変貌すること（メタモルフォーゼ）』

——これも黒板に書きました。授業後の学生のジャーナルに「中森明菜のメタモルフォーゼという歌はそういう意味だったんですか」と書かれていて……（笑）。「変貌する」という言葉自体は、森有正、経験を大事にしてきた哲学者ですが、かれの思想展開の中期に、「経験の変貌」ということを言い出していますが、その言葉を借りました。

『『出会い（124人と出会う）→かかわりの変化（自分をいかす、相手をいかす）→学ぶ（ ）』——これを黒板に書きました——。

『『出会い』から話しを進めます。私（中野）の出会いのイメージは「思いもかけないこと」が私の前に現れてくること。学びにつながる出会いのあり方は「思いもかけないこと」が私の前に現れること。』

——まず、出会いとかかわりと学びについて、「出会い→かかわりの変化→学ぶ」という言葉を、直線的につないで提示をしました。つづいて、出会いというコトバを聞いて私の中で思い浮かぶことばのイメージを、「「思いもかけないこと」と出会うこと」、これが私の中にある「出会い」という言葉の持つ大きなイメージです、と。最終的に学びにつながってくる出会いのあり方は、思いもかけないことが私の前に現れてくることです、と。これが私の中にあるひとつのイメージです。今日のテーマの3つの言葉がどうつながっていくのか？

いま124人と出会うということをやっている、出会って、いろいろなかわりがうまれるのかなんとかよくわかる、印象に残る人があったり、そのまま過ぎてしまう人があったり、でもどうしてそれが学ぶということにつながっていくのか。学生の多くにとっては、われわれスタッフが提示したテーマが結局のところどこでどうつながっていくのかよく分からないという疑問点がジャーナルに書かれていました。そういうことから、「出会い」が「学び」につながる流れとはどのようなものだろうかということで話そうとしたわけです。

11:15

——ここで中野自身の出会いの経験を紹介します。このひとつ前の授業は「夏の出会い」と題して夏休みにあったことを学生どうし話してもらったので、私もこの夏休みにあったことを事例にしました。この話しは授業記録にも要点が書いてありますが、少し詳しくお話しします。

この夏は思いもかけないこととの出会いという言葉の普通のイメージからすれば、特に新しい場所との出会いとか、新しい人との出会いもなく過ごしていました。ところが9月に大海（おおみ）という三河の小さな村に行きました。その駅でひとつの出会いがありました。その時大海に行った理由ですが、家を建てようと思っていて、最近の家は、高気密高断熱を重視するという新建築基準法にそった外界の自然に対し閉ざしていこうとする方向があります。それに対して日本の従来の家は、高温多湿な日本に合うように夏の暑さをいかに避けるかを基準にした、いわば開放型でした。それが今はエアコンなど人工的な空調装置ができたので、できるだけ外気の流入を閉ざして熱効率を上げようという方向に変わってきています。私もずっとそういうものを作ろうと思っていたんです。妻がすこし心臓がわるいもので夏の暑さはすぐく体にこたえるようなのです。ところが知り合ったある設計士に「今自分が手がけている建築中の家を見てくれ」と言われました。その建築現場が大海にありました。「本物の日本の家は体にやさしいですよ」のことはさそわれて妻と2人で出かけたのです。その日は一段ときびしい夏の太陽が照りつける日で、駅から5分ほどの道のりが遠く感じるほどでした。その家はいかにも田舎にありそうな小舞の土壁で作った大きな家で、従来の日本の家のつくりを説明する格好のモデルのようでした。「昔通りに作ってあると涼しいでしょう」と言われて、半ばでき上がった家の中を案内されながらいろいろ説明をしてくれたのですが、でも実のところあまり涼しく感じなかったんです。帰りの道はさらに遠く感じました。ようやくとっていいような気分で駅に着き、待合室で電車が来るのを待っていました。そこは腰までの壁がある以外天井までは筒抜けの小さな空間で、「クーラーがあったらなあ」と恨めしい思いさえしました。線路の向こう側には、小さな芝地に何本かの緑の葉をひろげた広葉樹とその背景に杉の林がつづいていました。暑さにばててもう冷たい飲物を買いたい出るのも億劫な気がして、あまり話しもせずボーッと前に見える景色を見ていました。そのとき、スーッ

と風が吹きぬけていきました。それがすごく気持ち良かった。風が体の中を通り抜けていったように、思わず「ああ、なんて涼しいんだ」と心底感じました。まさにその時、はじめて風と出会った実感がしました。それと同時に、中を風が吹いているような家を建てようと思ったんです。これは決して大事件ではありませんけれど、自分の感覚が何らかの状況で開かれていく、五感が開かれていく時に、起こったことで、自分の意図で起きたことではない。このとき自分の中にスーッと入ってきたこと、それが今も強い印象として残っています。これは自然とのかかわり方をめぐるひとつの例です。風は、生まれてこの方ずっと私の周りに吹いていたと思うのです。風に触れる経験は数えきれぬほどしている。風とは一体どんなものかって、言葉は知っていても自分の感覚の中で実感することは本当に長いことなかったなあと思ふのです。新たな風との出会いがあったということです。

もうひとつささいな事ですが、今度は人とかかわり方について、僕と妻の関係をめぐってです。大海に行った次の日から彼女は調子が悪くなりました。暑かったせいもあるのでしょう、体調を崩して仕事を休んだんですね。その頃彼女は職場で新しいプロジェクトを始める準備におわれていまして、そのことで部下との人間関係がうまくいかないで困っているという悩みを前から言っていました。話の中身はプライバシーに触れると困るのでカット。とにかく、こちららも夏休み、彼女も休んだということで、久しぶりに二人でゆっくりと話をすることができました。私もゆっくり彼女と向き合ってしゃべることが長いことなかったように思います。その時気づいたんですが、彼女の顔を見て話したことって、本当に長いことなかったなあと思いました。その時彼女の顔を見て話している自分に気づきました。家の中にいるとどうしても顔を見ないで、表情の変化も捉えずに、つい言葉の中身だけ聞いて受け答えをしてきた自分がいたと、はっと気づいた。その後から、時々意識して見ないといけない、彼女の顔を見て話をすることを大事にしようと思いました。そうすると、よく話が聞けるようになりました。また話を伝えようという意欲があがりました。そういう二人の関係、かかわり方が変化したと思います。

自然との出会いと、20年以上つきあっている彼女との関係、でも、かかわりの仕方はだいぶ変わるということを経験しました。

11:40

『出会い(124人と出会う)→かかわりの変化(自分をいかす、相手をいかす)→学ぶ(自覚化)…新しいかかわり方が身につく』

「行動変容が起こるまでに自覚化する。自覚化するステップを大切にする。」
できるのか……するの……。「新しいかかわり方が身につく」その先に新たな関わりが開かれてゆく。

—関わりが変化していくということが自分をいかすというねらいとつながっていることだろうと思いました。学ぶというのは、そうした自分のかかわりの

変化というのは、出会いは偶発的というか偶然的な要素がたくさんあります。それが学びに至るためには、しっかりと身に付いていく、恒常性が、学びには必要なわけです。そのためには、ある種の自覚化があって、それを自分の意志、努力において継続していくことが必要になります。直線で3つの言葉をつなぎましたが、かかわりの変化から学ぶこと、ここには実にいろんな要素が絡んでいると思われまして話は少しだけ後でします。そして最終的には行動の変容が起こること。これも人間関係科で大事にしていることだと思いますけれども。そうしたことを自覚化していく。出会いから起こる変化を自覚化していく。そのステップを大切にしていくことが、新しい関わりを身につけていくこと、新たなかかわりを開いていくことになるだろうという話をしました。授業は、この後学生とのやりとりということを期待して進みました。

11:51 2、3人で話す

——ここで話し合うよう促しますが、全体に動きがなかったので、質問を促しました。

11:55

「こんな図式通りにいくのか?というような質問はありませんか?では最後に一言。

『『学ぶ』とは変貌すること。』

12:00

「思いがけないキヨシさんを見たような気がする(星野)」

12:01 ジャーナル記入

——ジャーナルを書き終わった人から提出して終わるのは他の授業とあまり変わりません。

概要プリントに戻ります。

「基礎概念の予備的な検討……コトバをめぐって」のところから先へ話を進めたいと思います。私は哲学を勉強してきました、コトバを大切にしたいという思いが強いので、コトバを検討してゆくという方法で進めたいと思います。ここでは、「教える」と「学ぶ」、「体験」と「経験」、「かかわる」、「まなぶ」を取り上げてみます。

(1) まず一つ目は、《教えるひと》と《学ぶひと》というコトバです。教育とか学習とか言ったとき、何気なく使っているコトバです。あるいは教師である、学生であるというコトバも。教育、教えるといった人と、学ぶ人との関係は、人関の中では、よくイメージされることですが、人間関係科のスタッフは教える人というよりも、ファシリテーター、助言者であると。学生自身の学びを促進するという意味でファシリテーターと言われます。確かに、教える・学ぶというと、教える者が学ぶものに対して、上から知識のようなもの、理論のようなものを、ゴソッと埋め込む。答えを知っているのは教師で、学生はそ

れを探りあてる。これは学生自身も人関に入ってきたときには、強く思っている教育観であり学習観であるわけです。それを学生自身が自分が学ぶという主体性を持った学習の場にしようと努力しているわけですが、教えるということが、逆の意味で上下関係で捉えられ過ぎているのではないかという思いが少しあります。もともとのコトバの意味からすると、漢字的な意味からすると教務学務、これは対の概念でありまして、学ぶものがなければ教えるという関係性を持ったものもない関係概念なんですね。それも大事で、我々スタッフは教えるという役割の中で何をすべきかということ、学生との関係の中でいつも自戒していかなければいけないと思っています。

(2) 基礎的なことで「体験から学ぶ」ということで、体験というコトバと経験というコトバ、先ほども出しましたが、森有正が「経験を大事にしていこう」という哲学を述べていますが。一般的にこのコトバの意味を見ますと、日本語では経験と体験といいますが、西洋語の系統、ラテン系の言葉では、例えば英語では、Experience というのは体験も経験も区別がないわけです。日本語ではこの二つは何かニュアンスが違う。一般的な意味合いでは、体験とは具体的で、一回的な、人関でよく言う「今ここ」、が非常に強く特徴的だと思います。また体験というのは、非反省的。知的な整理というのでしょうか、固くは理論化するか知的に理解するかということを取りあえずは含み込まない、非反省的であるということが特徴だと思います。それから、体験とは、日本語では「体」というのが含まれますように身体の中にうごめく様々なもの。とりあえずパトス的な情意性、それから全体的な身体性を強く含んでいます。それはまさに体験は体験するものというのが、一つの身体の中で行われるわけですから、個人の自己中心性の契機を強くはらんでいると思います。それに対して、経験とは、体験—先ほども言いましたが、ある種の主体性であるとともに主観性を強く帯びたものに対しては、体験そのものはその様な主観性を持つが故の偏狭さを常に消極面として持っているわけです。それを打破していく、それを乗り越えていくという知が持っている反省的な契機、自覚的な契機を含んで、経験というのは使われる、そういう意味合いで私は使いたいということですが。そこに、共同性というか、他者とあること、ともに働いたり、考えたり、話し合ったり、そうした共同化の契機が胎動していこうと思われる。そうした反省的・自覚的な契機を現実化して行くには、体験という一回性を持ったものを読みとっていく行為、ディルタイの言葉で言うところのふやして、了解という用語が哲学では使われますが、日本語では、わかるということ。学習の中でわかるという契機が、自分の中で分かることが学習者にとって必要になっていくのだと思う。なぜドイツ語を使うかということ、西洋語、ゲルマン系の言葉ですが、ドイツ語には、日本語の体験と経験に類するコトバの使い分けがあります。体験には Erleben、経験には Erfahren。ディルタイの Lebensphilosophie という「生の哲学」と訳されますが、leben とは、一人ひとりのわれが生きて

いるいのちそのものです。その中で、ディルタイは、その体験ていうのは Erleben といいます、体験とは人間の主体的な働きそのものであり、生と世界とが会おう根源的な場であると規定して、彼は哲学を展開したわけです。生の主体である私と世界とが会おうということを用意してくれるのは、体験だと思えます。その出会いによって体験とは、これは私の言葉ですが、既に知っている既知の、あるいは既にあるの既存の枠組みを突破していく行為になりうる。そういう含み、意味合いをもっている。それが体験を重視することの大切な側面ではないかと思っています。

(3)「かかわる」という言葉ですが、かかわるというのを拘束の拘を使いました。関を使ったり、係を使ったり、いくつかありますが。拘を使うことは滅多にないのですが、わざわざ使いました。学生とのつきあいの中で強く感じるのですが、人間関係科だから、人間関係に関心があって来るのかなあと思うと、新しい人や知らない人、ある一定の、仲間ができないうちはいいんですが、仲間ができてしまうと、それとは違った人へのかかわりを作っていく、つながっていくということに対して、異常なる恐れとか不安とか嫌悪感を強く感じます。僕自身にも多分にあると思うのですが、学生の現実の人間関係や友人関係がよく見えないからかも知れませんが、それが非常に強く授業の場で感じることで、日本語のかかわるという言葉のニュアンスですが、拘束の拘は、ひっかかる、ひっかけられる。自分が否応もなくそこにおかれてしまっている、逃げようもないという。これは「かかりあう」というような表現でも出てきます。どうやれば、学生の課題であると同時に、我々人間みんなの課題ですが、自分自身からかかわりを開いていくことはいかにして可能なのだろうか。大きな課題でなるし、人間関係科の大きな課題の糸口というか、そのための理論も開発することが必要なだろうとも思います。ちなみに、この「かかわり」とは、自ら関わりを開いていく、関と開を使いましたが、関という字は両開き門ですね。それを関所と言うように、閉じる、閉の状態ですね。かんけいとはまさに拘であり関であるという中国から学んだニュアンスもありますが、日本語そのものが、かかはる、ですね。それ自体がかかわりが、プラスのイメージよりも、マイナスのイメージを言葉として非常に重たく持っている言語だなあと、意識的ではないが、いかにプラスのイメージばかりを言っても、我々が日本語という言語を使っていく以上、そこに対して自分がどんな態度をとるのか、自覚化していく必要がある。

(4)「まなぶ」というのは、日本語語源的には確定したものではありませんが、一般的には、まねるということから来ているだろうと、一般的な推測できます。誰かの何かの真似。発達心理学の話を書きましても、乳児期に母親とのかかわりの中で、人間としての振る舞い、自分にとって初めての他者との関係を学んでいくと言われてはいますが、ことの正否は分からないところはありますが、第一の他者のまねをしていく。それは社会化の課程が進んでいく

中で、それが友人になったり、親兄弟であったり、身近な大人であったり、学校の教師であったり、その様なまねるといことの中で社会化が行われていくという風に思います。その中で、日本語でいうしつけという学び方は、日本語の中で学ぶという一つ原型的な形を示していると思われます。柳田国男も民族学的に指摘している点です。しつけは、特定の人に教えるというよりも、一緒にいて、見習う、見て習うことによって、学習者自身が見よう見まねで、習熟し、身につけていく。しつけというのは身を美しくいう、後の時代に付けられた日本独特の言葉ですが、こういう漢語はありません。そのように日本人がとらえていったということは、恒常的に常に、学ぶということが単なる偶発的な一回限りのことではなく、恒常的に習慣化され、身の中に既成が生まれて、ああいうことに対して、こういうふうに、という流れが自然になるようにそこまで訓練していくわけです。そして恒常性とは、学ぶと言うことの中では非常に大きな要素だと思います。そうやってしつけていくことの大事さは、日本の場合には、人に笑われないということ。これも柳田邦男が指摘していることですが。大事な方法論は、いわゆる村の中で、叱るという行為よりも、笑うという行為によって、「お前の行為はそれは人並みの行為じゃない」、普通じゃない。という仕方で指摘を受ける。いかに他人と違わないこと、他人から笑われないこと、恥ずかしくないことをする。これがしつけ方の学習というか教育方法というか、大きな特徴です。日本の文化の中で行われてきた学習方法だと思えます。ただしその中で、行動、その人自身がどういう風な変化を…というのは、身につけるとい側面における行動の仕方が変わっていくことは、学びの大事な要素だとい指摘の中で、学ぶということがどうしたらその人の行動の変容にまで至っていくのか、その方法を検討することは大事なことだと思われます。

だいたい1時間ですよ。

中村：そろそろ50分。



中野：3番目の題目ですが、「《出会い》と《関わり》と《学び》はどのようにつながってゆくか？…小講義より」。先ほど少し事例を入れながら話しましたが、基本的には学ぶといのは何かそこに変化があるといこと。これは「コトバの予備的検討」で言いませんでしたけども、変化といのは広い意味で何かが変わることで、様相が変化するとい言い方もありますが。変貌とい、けものへんに兎とい非常に強いコトバを使いましたのは、インパクトのあるコトバを使いたかったとい思惑もありますが、その下にある「体験～出会い…2種類の出会い」を見ていただけますか？出会いとは、様々な偶発的な要素によって出来事として起こります。我々はいろいろなものに出会います。その中で、それっきりでフッと忘れてしまったり、無視したり、出会いとは、ここでは一般的に出くわすことですよ。エンカウンター。何かとでくわす。一番広い意味でまず考えていただいたとして、何かを体験する場面の中で何かと出

会う。そのときに、仮に出会いA、出会いBと名前を付けたとします。出会いAとは、それまでの既存の自分自身がイメージできる枠組み、処理できる、わかる。例えば人と出くわして「これは人だ」とわかる。極端ですが。つまりこれは何？というのが大抵分かる。自分がそれに対してどうしたらいいか、これは、相手が動物とであってもいいですし、車や動くものだったら。それが自分の所にドーンとぶつかってきたら、危険だと。危険だという判断も、既知の枠組みの中でこれは危険か危険でないか、判断尺度を成長の過程の中で獲得していった、その枠組みで判断してしまう。全く初めてものと出会ってもそれは…我々の一つの関心は生命を維持することですから、生命に危険があるかどうか、もう少し言えば生命を促進するような、良いものかどうか？よいものならこれともっとつきあってみようか、そうするともっと楽しくなる、生き生きしてくる、欲求も満足できる。そういった善悪の判断というのは基本的にはある。既知の枠組みの中で、大半のものが行われています。出会いにおいてもその様なものだと思います。

この辺が穴なんです…知識とか、記憶の量が拡大していく。新しいもの、初めて出た人の名前とか、そういう知識とか記憶とか、尺度が変わるというより量が拡大していくということで。コンピュータの処理と似たような、情報的な知識としてそれはもちろんコミュニケーションできますが、伝達可能なんです、情報処理型のそうしたものへと受け継がれていくような。「出会い〜かかわり」。なにか学んだいっても、そういう流れで今仮に概略情報処理型と書きましたが、これはある種の大きな枠組みの中で個々の細かい要素とかニュアンスがよく分かっていない点を分析的に判断して何事か分かっていく、知っていくというような分析的な判断。これはカントの用語法をそのまま使ったコトバですので適切ではないかも知れませんが分かりやすいかなと思って。で、これは基本的には同質的なものですね。既知の枠組みの判断で処理できる。量的な変化。それを常に比較したり、同定したり、対比したり、そうした比較対比の中で、あれはこう、これはこうと随時確認していくような判断につながっていくのではなからうかと思えます。

それに対して出会いBと書きました。私はこちらの方を事例として話しました。出会うといっても異質なもの、すなわち他者、自分と絶対的に違う他者と出会うということ。それが本当にあり得るのだろうかというのは哲学者の間でも意見が分かれるかも知れませんが。まさにそうした他者と出会うこと、自分とは徹底的に違う生命と出会うかかわりの場にはいると、そのようなことです。それは自分自身が持っていた尺度の枠組みで解釈できないので危機的なことである。既存の枠組みが揺らいでいく。時にはそれは壊される、まさに解体される。解体されることによって再構築されていくという契機、チャンスの時でもあるわけです。それは、簡単に言えば発見という言葉が使えます。それは人間の生命活動とか、命が動いていくというか。生が流動して流れている、簡単に

言っていると生き生きしている時という風に考えます。堅い言葉で書くと、知識の質的転換・行動変容を促す発見的な生の展開、契機。「思いもかけないこと」という原論での授業の話の冒頭でも言いましたが、それはこのことなんです。偶然的。自分がそれを計算できないとか、計画できない。そのような何ものかと出会って、思いもかけないことが、ひとつの学びという恒常的な変化にどうやって結びつくのか。偶然がある種の、必然に、穴風に言うと、偶然が必然にどうしてなるのか？誰だって不思議に思うことですが、それに近いようなことです。で、その下の「出会い〜かかわりの変化」というのは、まさにそのような、何事かが偶然との出会いの中での偶発です。それが、自分の中での変化として起こってくる中で、世界との関係性が、…風の事例で話したことです。そういうかかわりの変化、世界とのかかわりの変化。そして、また妻との関係の事例で言うと、まさに人とのかかわり。そういう様々な局面で現れます。それが、学びというある種の恒常的な変化、身に付いた変化まで至っていく、まさに変貌、質が転換する。顔つきまで変わっていく、そのイメージで変貌という言葉を使いましたが、それを自覚化して、主体化していく必要があるだろうと。そしてそれを絶えずあるきっかけで起こった変化、それが体験の状況ですけれども。それを継続性あらしめる。それを行動化していくという持続の中で、この辺の仕掛けは僕もよく分かりませんが、そういうことの必要性があるとおもいます。

おわりに、一番始めに言いました、人間関係科でよく言われている、「体験から学ぶ」「学び方を学ぶ」ということは、皆さんにとってはどういうことなのでしょう。話を終わります。

中村：それでは再開していきましょう。質疑応答、ご意見など。

山口：全体として話が分かりやすかったんですが、一部分からないところもありました。その話から刺激されていろいろ考えたこともあります。中野先生とは原論と一緒にやったこともあるので、全体としては受け入れやすかったです。最初の方の「初めに」の部分。今期のねらいの2、自分をいかす相手をいかす。共同の場をどうしたらつくれるか？という話がありましたが、これは私たちが原論をやった時も大きなテーマだったもので、これを聞いたときに、このパラドックスを超えていくためには時間軸が必要だと思った。そのことは後の方で変わるといふ風なことで話をされていたので、同じことだなあという風に思っていました。時間の軸が入って自分が変わり、相手が変わることが起これば、自分も生き、相手も生きるといった場が生まれるということが起こるのだろう。同時に二つのその場では全ては生まれえない、そんなことを思いました。

もう少し後の話では、関わること、拘るとか、おそれのことが出てきたときに思ったのは人間がすることにはリズムがあるんだろう。恐れを感じるときもあるだろうし勇気を感じるときもある。安定と不安定がある。生の律動、リズム



ムのようなものがあって、かかわることに対する恐れが生まれてくることもきつとあるのだろうと思う。またあるときには勇気を持つという風な、生きるもののリズムもかかわるということを考えるときには考えなくてはいけないのだろうなと思いました。もうひとつ、かかわるという時には、私たちは一対一の出来事を考えるけども、授業などの時は一対多の出来事、そういう授業やグループの時、一対多、一対一のできごとは、そういう観点から関わるということを考えて一体どうなるのかなと思いました。一対多のかかわりは可能なのかなあとか。あるいはそれがないと、共同体って一体なんなのかなあと、そのことから少し考えました。

3つ目のパラグラフのところで、体験から2種の出会いとい時は違うものというか、別のことを考えました。出会いA、Bはおかしいのではないかと思います。同質なものと出会うという時の同質って一体何なんだろうと思ったんですね。最初、原初はあらゆるものがきつと異質なものなんじゃないかと思うんです。あらかじめ同質なものと出会うといったことは変な感じがするということと、同質の中身は何なんだろうといろいろ考えると、そこに思考の枠組みとかいうことが書いてあって、例えば小学生が $1 + 1 = 2$ を学んだ。そして次のページをめくったら $2 + 2 = ?$ と書いてあるのを見たときに、先生はこれを同質だと分かっているんだけど、その子にとっては“これ何だろう”と思う、その異質に出会って、そして前の考え方と同じ方法で解けるというときに、 $2 + 2 = 4$ になることが分かる。それを同質の出会いというならば、そういう風なものなのかなあ？とちょっと思ったんです。最初から同質なものと出会いがあるのじゃなくて、異質なものと出会う。そこに共通する枠組み、尺度とかを発見する出会い方と、もうひとつ異質なものというか自分を変えざるを得ないというかなんていうか受容すると言ってもいいかも知れないけど、もうひとつの出会い方がきつとあって、同質とか異質は後から生まれるんじゃないかなあ。出会うのは、異質なものとしか出会えないんじゃないかなあと思ったんです。もっと考えると、本当に異質なものと私たちは分かることができるんだろうか？とも思った。本当に異質なものって分からないものにきつとなくなってしまって、ある程度自分で予測できる範囲のものとか出会えない、そんな限界のようなものを私たちは持っているんじゃないかなあ。自分で了解可能なものとか出会わない。本当に異質なものとは出会えようもない、そういうこともあるんじゃないか。そういうことをちらちら思いました。

中野：出会いA、Bに関しては、出会いに関しては異質なのではないかと言うことは、僕のコトバの本質的な位置づけからするとそうなんです。ただ、最近人間が丸くなってきたのか、世間の人がどういう風に「出会う」というコトバを使っているのかを、もう少し広い日常言語としての用例からすると、もう少し広い意味で使っている。ここでA、Bに分けたのは、原初という意味では、山口さんの言うように異質だと思う。「出会う」は学生や我々がよく使うコト

バ。その出会いが、本当の意味で学ぶということ、これはまだクエスチョンなんです。学ぶということにつながっていくような、様相を帯びて了解して使っていくことなのか、そうでないのか？後ろがどうなっているのか、後ろを先に考えていると言えば、確かにそうなんです。だから結果からというならまさにそうなんだろうと、印象に残ったのは、なかなかそういうことですね。それから、異質なものは本当に分かるのか、根本的な問題。人間の限界だと思います。人間は人間の個的な限界を超えることができるのかということとは、いつも、超越的な契機というのは、僕の頭の中に去来する。何か異質なものと出会わせることがあると仮定するならば、それを保証するものは何か。自分の中のどこを探しても、今のところ見いださない。本当の意味での他者と出会う。自分が、自分の中に取り入れて、消化してしまうやり方以外に、…別の言い方をすれば自己中心性に取り込まずに、他者とかかわるということは、可能なのはきちっと考えてないのですが、予感だけです。そこにやっぱり神を考える。

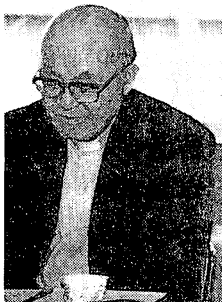
大森：AとBについては私も聞きたい。山口さんが言っただけでも、出会うというのは、僕は自己以外は他者、すべて出会うとすればそれは異質かなと思う。ただ、自己も異質かも知れないし、同じとは言えないかも知れない。中野さんの話を聞いてると、同質異質というのはどうも考え方が同じ枠組みか、そうでないか。Aは分析判断とするなら、Bは分析判断がきかない相手というか、そういう風に言われた方が私にはピンとくるという感じがします。

中野：大森さんは、出会うと言うことは？

大森：あまり考えたことないですけど（笑）。出会ったなというときは、やはり思いもかけぬ、自分のもくろみはずれたたか、壊されたたか。そういうときに出会ったかなと、ああこんな人と会うとは思わなかったとかいうような、そういう時に出会ったかなと思います。自分の思考の枠組みとか、考えが及ぶ範囲のことが起こっても、それほど出会ったかなということをあまり思わない。そういうこともあるかな、と思うくらい。そうでないときに出会ったかなと、そういう印象を持ちました。でも、Aも出会いと言えるのかもしれない。

大橋：一般に出会いということを使うとき、異質なものを前提にしていると思う。また、意外性の発見ということもありますよね。これも出会い。聖書を読んでいて、もう流してしまっていて出会ってるんでしょうけれども…。ただ、ある時ハッと気づく。こういう意味があるのではないか？そして今まで読んできたものが非常に生き生きとして感じてくる。これは出会いといってもいいのではないか。そういう意味で意外性の発見という風に…。あまりにも恒常化されてきた、今まで普通だと思っていたことが壊されてとかひっくり返されて。それも出会いというのかなと。今まで私はそんな風にしか考えたことがなかったので、何か新しい、それこそ意外な発見でしたね。

中野：出会いというのは、授業の流れの中でコトバとして、出していくために使った部分があった。もうひとつ「出会う」ということで大事だといつも思っ



ているのは、触れるということ。触れるって、どこでもあるじゃないですか。学生でも。本当に日常的事なことなんだけど。触れるということの根元的な出来事。それがやっぱり、人との関係の中でとても大事なことだという思いがある。身体に触れることによって、それが脈々と生きる体験もあるだろう。身体ではなくて別の形でとか、コトバが媒介することもあるだろうし。触れるということの方が、出会いというコトバより自分の関心としては強いです。

中村：心理学的にはちょうど入ってくるというか、ピアジェの同化と調節ということに入ってくるなど聞いていました。同質なものと出会うか異質なものと出会うかという対象を問題にしているのではなくて、自分自身の枠組みの同一性異質性を問題にしているんですね。自分自身の枠組みで捉えられないものと出会ったときに、自分の枠組みを変えていかなければならない。そこに自己中心性からの脱却とか、行動の変容とかが生まれてくるという流れだろうかと思っていました。

中野：そういう理論付けの仕方というか、学習心理学とか、そういう形での…いろんな形を僕も聞きたいです。

中村：鳥が飛んでいて、あれが鳥だよと教えられた子どもが、鳥っていうのは空を飛んでいるものだと思っていて、ワシが飛んでいるときにあれも鳥だというときが同化で。初めて飛行機を見てあれも鳥だと思おうとしたんだけど、何かすごい大きな音がして、鳥という常識ではとらえられなくなって、あれは飛行機だよと教えられて、自分の中で違うものなんだなということが分かってきて、そして鳥シマをちょっと変えて飛行機シマというのを作っていく、それが調節なんですけど。あらたな異質な思いがけないものと出会うという際には調節という枠組みが変わっていくということが必要になっていくのかな。これが行動の変容、枠組みの変容なんだろうなと聞いていました。

もうひとつ、出会いBの方の調節的な出会いというか、そういう出会いを考えた時、22期の原論では、キャッチフレーズが「つながる→かかわる→出会う→共にある」という順番でした。出会うが、もっと後に出てくる。

中野：その思うところは？

中村：異質なものと出会った時に思いがけなく出会ったというのではなくて、自分自身の枠組みが変化した時に初めて出会いがあるというか。対象の異質性によって出会うわけではなくて自分の内的な枠組みの変化によって出会うということが生じるのかなあ。そういう意味で後なのかなと。

山口：通常私たちはそんな風に使ってるよね。だけど中野さんは、どうも出会いというコトバでむしろ触れるというコトバに置き換えて、考えているみたいを感じる。もっとシンプルに出会う、触れる、しゃべる、顔を合わせる、名前を覚えるとかも含めて言っているのかなとも思いました。

中野：今の「つながる、かかわる、出会う、共にある」ということで、つながる、かかわるというのは、最初にかかわるというコトバで日本語のニュアンス

として言ったように、やっぱりかかわりというあるつながりの枠という中に、取り込められるニュアンスを持っている。もうひとつ「かかわる」と言ったのは、前のは強いので変な日本語になりますが、かかわりを開くとか、関係性を開くと言うこと、関係性に捉えられている。まさに、つながっているというのは自分がどうこうするというのではない、ある受動的な状態。といった関係イメージが一つあるとするならば、それが日常的に関わるということばが持っている、日本語が元々持っているひとつの大きなイメージとするなら、つながる、かかわる、というのが基本的にあってそれは大前提で持っていて、そこからどうやって、かかわりが開かれていくか、その契機とは何か、そのエネルギー源になっていくようなことは何かということに焦点を絞りながら、出会いBという風に言ったんですけれども。そこが、22期が3番目に会おうということを行ったのは、その意味においてはあまり違わないように思う。順番は違いますが。

中村：会おうというコトバを広範囲に考えた時に、25期の場合は、会おうA、かかわりのかかわるは関になるのか係になるのか分かりませんが、で学びという順番で、22期の場合は、つながるの次のかかわるはある意味では拘りも知れないし、その後に出会いBというのを規定している、そういうコトバの使い方の違いがあるのかなと思いました。

中野：今回のこの話の中では、人は基本的には世界とか社会に、すでにある枠組みの中に産み落とされて、そこからどうやって、自分が自分になっていくのかという課程を、何をネタにしながら、自分になる、私という人間になっていくことが起こるのだろうかということで、一番最初が全くのゼロというより、むしろある枠組みということで、今回、出会いとかかかわるということを使ったなど。いろいろ言っていた、確かにそうなんだろうと思います。

まどか：私は中野先生のこういうアプローチのかけ方とか非常に興味深くて、そして今日に関しては、出会いBというある意味では人と価値観で会おうというか。価値観で了解しあうというか。その辺のことをヒントに得たような気がします。先ほど、大森先生や、中村先生がおっしゃっていたように、出会いA Bの区分けというのは、自分の中での考え方か、共同体の中での考え方の枠組みという設定になるか、それは状況次第だと思います。自分の中での枠組みが変わることで、他者を理解することもあり得るし、相手の価値観が見えてきたり、自分自身との価値観の違いが整理できてある程度出会える、あるいは了解し合えるということが起こったり。また共同体といわれる組織としてお互いの言葉遣いの違いが見えてくることでお互いのことが分かり会えてきたりということが起こるかも知れない。それは状況がいろいろあります。私が興味深かったのは、自分がパラダイムシフトという発想法の転換をテーマにしながら、人間関係科のめざす学び方、学問性の新しさをとらえているので、出会いBのことをもう少し発展させて、展開していくと、人間関係科での学び方で大事にし



ている awareness の問題、気づくということ、どうして気づくということが学なのか、どうして人間関係科の学び方の新しさにつながるのかが整理できるような気がして聞いていました。演題は「もう一つの人間関係科論」という風に遠慮がちにおっしゃったようですが、もうひとつの人間関係科論というか、人間関係科の新しさというのは出会いBのところで、出会いBがこの21番教室で展開されていくこと自体が、人間関係科の生命圏というかそんな気がします。

最後の方の、出会いからかかわりの変化、かかわりから学びというところは、いわゆる私たち自身はかかわりシステムをどう形成していくかがテーマになると思うのですが、かかわりということをもっと大事にしながらの価値というか、教育システムとか学校制度とかどうやって作っていったらいいんだろうかというようなことが、私自身は課題として感じました。印象で、説明ができないのですが、自覚化・主体化の必要とか継続性・実行性の必要、これは時間軸も入っている言葉だと思いますが、それは自分、自ら、自己意識とか、そういうことが必要を育てていく、結局自覚化とか継続性とか自己意識の中で守られていく、守りやすいのかなあ。中野先生にだけ言っている様な話ですが…。

あと質問ですが、「コトバをめぐって」というところでカタカナでコトバと書いているのはどうしてですか？

中野：ものとか、人とかを、中立的な記号化するときの書き方をするときと同じです。どうも漢字で書きたくなかった。ひらがなで書くとひらがなばかりで、わかりにくいので、というそれだけです。深い意味はありません。

楠本：かかわり～学びのところで、自覚化・主体化の必要、継続性・実行性の必要とありますが、こういう部分が必要でない学びというものもあるのではないかという気がしています。と言うのは、出会いBのような出会いをして、そこでもう変貌が起きるわけですね。質的変換が起きると言うことは、新しい主体がその時点で生まれているということだから、それを主体化する必要があるんだろうかという疑問があります。あまりにもアバウトな、論理的にあまり考えられないので…。実感的に言うと、質的な変質がいつもいつも起こることではなくて、例えばTグループの中でとか、あるいは生きていく中で本当に何十年に1回の出会いなのかもしれない。改めて、主体化をする必要もない。改めて自覚化、化というようなそれを意識的にする必要もないような、それこそ変貌・変容と言われるような出会い方があるんじゃないのかな。そういう学び方があるんじゃないかなと思う。ただ日頃の授業の中で、そんなようなことはいつも起きないし、それを目指すことはとても危険なことだと思うのですが、意識的な主体化、意識的な自覚化、継続性、実行性というものが不要な質的な変化も有り得るんじゃないかなと思いました。

中野：そう言われればそうかなあと思うんですが。ちょっとその問題で考えたのは、習慣。ハビッツ。うまくまとめきれないです。ハビッツということが、人間が学ぶということの中で、どういうふうに位置づけるのかなあとい





う問題につながっているなあと聞きながら思っていて、まだ答が見つからない…。

伊藤：まどかさんが言われたことと楠本さんが言われたことと、私が思っていたこととつながってきそうな気がしたので発言します。出会いが起るための素地とは一体何なのかな、あるいは人間関係科での教育は、今楠本さんがTグループの中で出会いが起きると。だけどそれが、またいつも起ることを私たちは期待していないこともあります、そこで一回起ると。だけでももう起らなくてもいいかという、そんなことはなくて、あるひとつの、出会いのための素地ができてくる。そういうことって、どこにあるのだろうか。意識化していくことなのかも知れないし、出会いが起るための素地とか、起こったときの気づきとか、それらをどんな風に考えたらいいのかなと考えながら聞いていました。ありますよね、同じ体験でもちょっと意識を持って見ると全然ものが見えてくるというのでしょうか。出会いでもおそらくすーっと過ぎてしまわないでそれがパッと出会いになっていくような何か。それって、いったい何なのかなって。あまり哲学的なところはよく分からないのですが…。すごく大事なことだろうなと思いながら、出会い・かかわり・学びのどこの辺にくるのかなと思いながら聞いていました。疑問を出してるだけですが…どんな風に思われますか？

中野：こちらも聞きたいですね。出会いのための素地。うーん。

伊藤：授業の中で、これだ、という出会いの体験ができる人とできない人がいますよね。でも授業の中において、ああいうこともあるのかなと何となく分かっていて、でもその人が卒業して何年かしたある時に、パッと、電気がついたようにこれがあのときのこれなんだと、出会いが分かっていくというようなことがあってもいいのではないかなという気がしています。

グラバア：いただいたもので考えてみた。最初に出会いA、Bという話があったけど、その後に出会い、かかわりが書かれていて。私たちにできることは、関わることで、関わるということは自分の意志でできることだけれども、出会うことは自分の意志ではできないこと。先に言ってらっしゃるAとは、既存の思考の枠組み、尺度の中での出来事という面を取り出すと、こうやって言われていることが関わること、わたしができることというようなつながりがあって。そうすると、人事を尽くして天命を待つといいますが、関わりと出会いというのは私の中でそういうところがあって。素地の話もあったんですけど、私ができることとは人事を尽くすことであって、それは既存のそれのできる枠組みの中でしかできないんですが、それをやった時尽くされた時に、天命が、ヒラヒラと落ちてくるというようなことを考えたんですね。そういう見方の方が私の中にはフィットするなあと考えています。それでももう少し戻りますが、体験と経験の話があるんですけど、体験と経験というのはどういう関係にあるのか。やっぱり体験を越えて経験に至らねばという構図なののでしょうか？

中野：越えるわけではない。ここで使っている言葉の概念とは少し違うと思

ますけれども、体験の持っているある種の1回性、そういうものが事実化していく、そういう意味合いで捉えているところがある。経験は基本的に、人との関わりも含めて世界との関わりの中で、自己の中に内在化して、蓄積化されていく、それが自分の中で、自分も知らないんですけども、それが様々な形でごめいて、発酵していく、その中でそれがいかに、自分の経験として、コトバとして、提議する。自分のコトバとして提議する。自分のコトバでつかんでいく。それが経験ということ。彼は哲学者だから思想化したりするんですが、別に田舎のお百姓さんが野菜を作ったり、芸術家や職人が作品を作っていることも、彼は例に使っている。

グラバア：経が積み重なる、ことをイメージできます。そういう風に考えると、体験学習を考えているのだけど、この説明を見ると、体験学習のステップがありますよね。経験して、指摘して、分析、仮説化して…

中野：E I A Hのことですね。



グラバア：ええ。それが回っていくことと、それを重ね合わせて考えていくと、ある意味で、自覚的契機を含むと書いてありますよね。そうすると話が飛ぶんですが、体験学習の中で、分析や仮説化が弱いとよく言われるじゃないですか。十分に理論化できないとか。それが弱さと言われるのだけれども。この概念を当てはめていくと、E I A HのEの部分が体験にあたって、そのI A Hが経験にあたる。自己中心の契機が共同化への契機に熟していくということも含めて、そういう風に体験学習とこの話が私の中でつながる部分なんです。でさっきの話にまた戻ると、そういうことを言うてくると、体験の部分は関わり部分とつながるんです、さっきの構造から言うと。だから関わりはできる。体験Eの部分を提供することはできる。やることはできる。ところが、飛躍しているかもしれないけど、出会うということを考えていくと、出会うということが経験の部分と私の中で重なる。そうなると、人事を尽くして天命を待つことにもつながるけど。体験学習はE I A Hなんけれども、I A Hが足りないと言われるけど、できるところというのは体験しかないのではないだろうか。教育的な営みの場で、対象とできるところというのは体験しかないのではないかと。今ここ、1回性という…。今ここと言われていることは、ここで言われている体験ということだろうと思うし。体験学習、E I A Hと言ってきたけど、本当にそうなんだろうかなと思った。極端に、Eしかないんじゃないかと。話がわかりにくいですか？

中村：今の話の中で、結局教育的な場を作るということはEしかできないんじゃないかということと、それから中野先生の言わんとするEの後の自覚化・主体化の必要性という様なところ。論点ともなりうるのかなとも思いながら聞いていましたが。

グラバア：私たちの視野の中に、時間的な視野、基本的に体験学習をE I A Hの過程と言ってしまうと、Iの部分は私もまだ整理がつかないですけども、A

Hもある意味私たちができるとか、私たちが援助できるとか、いろんな理論をもっと提供しなければいけないという、どうしても発想が足りないという思いとか、いわゆる構造上生じてくるし、あると思うのだけど、もっと開き直るとするか、逆にもっと発酵させる時間を保証することが私たちに大事なのではないかと発想。もうひとつは、体験が経験へと熟していく、そのプロセスはいったい何なのだろうか。素地と伊藤先生がおっしゃったそれがいったい何なのか。それを新たにもう少しE I A Hの過程から見ていって、結晶化していかないといけないのかなと考えました。

山口：グラバアさんのいうこともよく分かっているつもりです。最近よくTグループをやりながら、E I A Hだけではないですよと言っている。学習のモデルがあれだけでは不十分だと感じている部分が自分でもはっきりしています。中野さんが最初に立てた問い、体験から学ぶ体験重視の主眼は何かということと、学び方を学ぶとは何か、という二つの問いからスタートして、最後にあなたは どう思いますか？という問いかけなんだろうと思いますけれども。それに関して、今この間にたくさん考えました。グラバアさんの話にもつながっていると思う。体験と経験の違いというのは、ここに書かれているのでよいんじゃないかなと思っています。ただ、体験を経験化すればそれで済むかというか、経験というのは何かあるのではなくて、経験化過程のようなもの、これはE I A Hという指摘・分析・仮説化の部分は経験化過程になるなあという風に思うんですけども。それでは体験、本当は私たちが生きるということは常に体験のただ中にあるんだろうと思うけれど、それしかないはずなのに、E I A Hを通ると経験化していくといったところにひとつの問題があるなあということも思っているんです。本当は体験の中に生きなければならないはずなのに、経験の中に生きてるとすると私はそれは間違いを起こすような気がする。Tグループが存在するのはそこに意味があるのかなと思ったんです。体験を体験できなくさせているのは、経験であって、Tグループは何をしてるかといったら、経験化をしているんじゃないかと、経験化してしまったものを体験に戻そうとしている感じがする。そこが僕が前からおかしいおかしい、このE I A Hはおかしいと思っていたところで、すごくつながってるんじゃないかと思うんですが。私たちは学び方を学ぶといったときに、E I A Hの問題だけを取り上げてるけれども、もう一度体験化過程といったものをきちんと言語化していくことができないといけないのではないかなと思っています。体験から学ぶといった時には、絶えず体験することを体験できるようになることを学ぶということ。体験からある原理なりを仮説的に導き出すという経験化することという、ふたつが体験から学ぶといったときに重要で、どちらかだけではなく両方をやらなくてはきっと体験から学ぶということではできないんだろうなあということを考えました。それから、学び方を学ぶという、つながってくるんですが、もう一つ考えたのは、先ほどの出会いA Bのことですが、やっぱり出会いBしかないと思うんで

す。それにむしろはっきりさせた方が…。もともと中野先生はそう言ってたわけだし、それをきちんとさせた方がいいなあと思ったので言うんですが。どうもこんな像が浮かんだんです。同心円ですが。中心に同質。その周りに、異質という層があって、さらにその外側に、無質という層があるように思えるんです。私たちが出会うとか学ぶと言ったときには、この異質の層と触れること、あるいは異質の層にもものを持ち込むことなんだろう。例えば無質は自分の全くアウト・オブ眼中にあるものを自分の眼中に入れてくる。これは異質と出会うことだろうと思う。それから自分の中にあるもの、自分で当たり前だと思ったものが、あれ？自分の中にも変なものがある、と言う風にして異質の層に持ち出すこと。そういった異質の層にもものを持ち込んできて異質と出会う、あるいは異質と触れることが、学ぶとうことかなあと思うと、学び方というのは、異質の層に無質の相から、いろんな、別の人の気持ちだとか考え方だとか起こってる出来事だとかを、自分で異質の層に持ち込むこと。それから自分の中の当たり前と思っていた何も感じなかった部分を異質の層に持ち出して、あれ？と思うこととかが、学び方を学ぶ時の非常に重要なものかなあ。これはまさに体験することなんだろうと思う。経験の上からは、あの人はこんな人とか、自分はこんなものか思っていたものを、まさに生々しく1回限りのものとして体験するというのは、その異質層に持ち込むことなのかなと思ったんです。そして、異質層が大きくなればなるほど、異質の中に生きようになることが、世間でいう大人になること、成長することという風に考えていくと、当然無質層、アウト・オブ眼中が自分の眼中に入ってくることで、これが無限に広がっていくと世界、宇宙を見ることができるようになったらいいでしょう。逆に自分の中を見ていくと、自分の中を分解していくことが起こるんだろうと思う。言ってみると、アイデンティティと思われていくものをどんどん崩壊させていくこと。できるだけ少数のものをもってこれが私であると言えるようになるということ。そのことが私たちが成長するといったことなのかなと。あらゆる自分、全て私と思っていたものが、だんだん分化していく、分かるということかも知れないけれども、そして異質層にどんどん持ち出していく。自分もどんどん分解して異質なものを外に出していくというか、自分と出会うということをしていく。言ってみると、自分のアイデンティティの拠り所となるものをどんどん小さくして行って、たったひとつの、あるいはそれはゼロになるのかも分からないけれど、そういうプロセスが私たちが成長するってということなのかな、なんてことを中野先生のお話を聞きながらつらつらと考えていました。中野先生の最初の問いに対する私の答です。

中野：おもしろい。

大森：ちょっといいですか？森有正の考えに沿って体験と経験ということを行うとするならば、例えばこういう風なことを考えてみたらいいと思いますが、平和問題というか。日本は戦争体験をしています。1945年に原爆が落ちて敗



戦したと。そういう経験をしたときに、どうするか。戦争しないようにしようとか、核兵器を持たないようにしようとしたと仮に思ったなら、この50年の間に、それを抑止するためにはどうしたらいいかという知恵を皆が出したり、同意したり、どうしたらそうしないで済むか、工夫してつくっていくことができたかどうか、できている、またはつくろうとしているんだったら、それは経験になるわけです。ところが実際それができていないから、体験のしっぱなし。戦争の体験しかしてない。でも、経験というんだったら、それを何とかもったいい方向に持っていくために、日本人がいろいろな努力をするとか、働きかけをする。日本の国民自体も一人ひとりがそういう意識を持ってやるような教育をするとか、そういうことが出来上がってくるのを経験といっていると思います。だからそれがどうだったかということだけを単に人に伝えたりすることだけではなくて、体験したことが生活の中で生きていく自分の支えとか、それが何かの形で出てくることを指しているんだらうと思います。

グラバア：そういう意味では、意味を見い出して自分の生き方の方向性を指し示すとなった時に経験化されるということですね。

山口：それはE I A Hと同じじゃないかなあ。非常に大きなマクロにとらえた社会現象のまで敷衍したE I A Hの考え方。

グラバア：重なっているけれども、問題は学習方法論として何ができるかと言うときに…。そう説明していくと、同じことになっていってしまう。うーん。

中村：一つ面白いポイントがあるなと思った。山口先生にはあまりにも待たせすぎてしまって一気に話がわあっと出ましたので(笑)、どこに焦点をあてたらいいのかよく分からないんですが(笑)。話の中で、経験ではなくて体験としてその場に生きることが非常に重要であろうと、ある意味で客観化した知とか、客観的、冷静的な自己像他者像は危惧になる場合もあるというところ、おもしろいポイントだと思いました。今ここで非常に主体的に生きることの重視と、そうではなく非常に客観的に知として自覚化しながら生きる生き方。E I A Hはそれを重視していますよね。Tグループの中では、体験レベルで生きていくことが中心になるだろうし、そうしたところで生きられると思う。それが非常に危惧になるときがある。今ここしか見えなくなるということがあるというか。両方のバランスみたいなことを感じながら聞いていました。

山口：両方言ったつもり。ふたつを学ばなければいけない。

中野：経験化の過程と体験化の過程というそのふたつが常に生きて動きながら体験から学ぶという風に我々はとらえようとしているんじゃないだろうか。

グラバア：体験がどのように経験化していくのはすごく大事なポイントなんだけれども、さっきのように、「E I A Hのプロセスだよ」とおっしゃってたしかにそうなんだけれども、そういうとらえ方をしていくと結局、元の、そうやって分析するのか方法を教えろとか、いろんな理論があるよとかいうことをもっと勉強しなければいけないのかなというところへ戻って行ってしまふんじ

ないかと…。

山口：あれ、何か誤解されてる？それは大森先生が言われた戦争体験とその後の平和活動について言うと、E I A Hのプロセスでもってそこで言ってる経験を説明できるけれど、逆に経験を体験化していくモデルがないということをお願いしていたつもりで、それをつくらなければいけないと感じていますと。

グラバア：経験を体験化というよりは、私が言いたいのは、体験を体験化する。本当に体験をしていくということ、体験を本当に体験していければ。体験が本当に体験できないから経験にならない。さっきの言い方だと、体験を十分に経験化できなかったから平和問題が何も生み出せなかったという論旨だと思うんですよ。構造が。ここで言おうとしているのはそうでなくて、体験を本当に体験していくということをすれば、そのことによって経験化することが大事だと。

山口：体験が体験化する学習モデルが必要と。それは私もそう思っています。

大森：ただ、森有正の場合は違うんです。体験と経験とははっきり分けてある。体験というのは、我々が使っている体験じゃないんです。それを体験を体験すると言うと、もうわけが分からなくなっちゃうんです。森有正はおいておいてこの話は進めた方がいいと思います。

中野：そうなんです。僕も森有正の用語法を使おうとしたわけではなくて。体験という言葉は、我々も無造作に使っているわけですが、例えば「体験学習」とか。そうすると何となく分かった気になるし、学生も分かった気になるんだけど。体験するって一体どういうことなんだろうか？本当に、経験科学も含めて、経験というのはかなり無造作に、日本中で、学問の世界でも使われています。人間関係科は体験学習を柱にしていくという限りは、我々自身の中で、もう少し我々自身のコンセプトとしての、体験すること、学ぶということはどういう関係にあるのかをもっともっとつめて検討していかないといけないと思います。

山口：体験と経験の説明は、私はこれでよく分かりますと思います。

中村：人関スタッフがあまりにもしゃべるのでしゃべれなかったという方もいるかと思いますが。もし何か言いたいことがあればどうぞ。

津村：討論というよりも山口先生が言われた、異質のこともおもしろいと思うし。僕はそこがカギだなと思う。そこに気づくとか、見えてくるものとか、他者が分かるのかというのは、やっぱり違うから見えるので、やっぱりそこがキーワードになるなと思いました。非常に重要になるだろうなと。その同心円はおもしろいし、少なくとも異質層にどう持ち込むかということ、見えてくるということ、すべてそこだろうという感じがします。もうひとつ、山口さんが言った経験を体験化するという、これはおもしろいモデルだけでも、そういうことって何なんだろうと。体験から経験、それは筋道として分かるし今までやってきた道というか、見えてくるものとかそれを振り返っていくとか、客観視していくという意味があると思う。経験を体験化するといったときに、

それは何をやってしまうのか？

山口：経験を体験化するというより、僕は絶えず体験し続けることという風に言った方がいいと思う。それを妨げているのが経験だと言いたい。絶えず体験のただ中におり続けることを学ばなければいけないということと、体験していることを経験化することも学ばなければならない。そのふたつが体験学習から学ぶことであり、学び方というのはその二つの方法を学ばなければいけないと思う。体験を経験化する方に関しては、E I A Hのモデルがすでにある。これは経験科学の方法としてずっと昔からあるものを形式化しただけだし、僕は基本的に森有正も変わってないと思う。むしろ体験を体験し続けるための学習モデルがない、そこが私のポイント。

大森：それは、森有正はそうだよ。体験を体験し続けるためのモデル。

山口：じゃ、どのようなものがあるのかをもう少し次の研究会でお話をさせていただくと。

大森：むしろ、今言っているのは、経験化してしまったことを砕くというか壊していくということだと思う。

山口：それには方法論があるというわけ？

大森：方法論と言うのは読んだことがないけど。

山口：ただのドグマの様なものはいけないと思う。むしろ私たちは学習モデルとしてのステップを作らないと、E I A Hに対抗できない。僕はおかしいと思っているんだけど、それに対抗することができない。

大森：そういう風には考えていないからね。学習的にどうするかというよりもむしろ、生き方の問題として提示してるから。

津村：体験をし続けているといっても、そこに、人関の言葉で言うと、プロセスというのがあるね。何が起きているかとか言い出すと、戻っちゃうよね。

山口：そうだよね、うんうん。

津村：で、体験を体験し続けてるかどうか、何の自覚症状もなく今生きてます、というのではいかんわけでしょ。そうすると、何かわからない…。

山口：それはTグループの中で私たちは体験しない？本当に体験が進行しているところ。そうではないときに知性化されていたり、本当にそこに人がいて体験のただ中にいるときというのが分かってるというか。それは分かっているなければファシリテーションなんてできない。だからグループの中において、トレーナーをやれている、見えてるんだと思うんだけど、それがよく分からないんだよな。どのようにしてそれが進むのか。Tグループをやりながら、E I A Hのモデルではないということは分かってるんだけど、そこが分からない。

津村：体験してるということ自体、やっぱり僕はそこに戻ってしまうんだよね。見えることというか、自分の中に思わぬものが出てきたり、まさに体験。

山口：その時に体験が起るわけだ。異質性に入ったときにきっと出会いがあって、体験されるんだと思う。自分が体験して何かものをもらう、そのことか



な。

津村：そう。

山口：持ち込む方法と言ってもいいのかも知れない。

津村：今の、少し戻します。単純な体験を経験化するとかいうことではないと。体験を体験化するということでもないみたいな気がする、というところで止めようかな。

山口：フィードバックとか何かだったら、またことと同じになってしまうかな。

中村：ひとつの論点が見えつつあるところで、それもまたおもしろいテーマで、考えていかないと。あとは？

まどか：大学教育や大学機関の中に体験学習をどう位置づけようとしてきたか、位置づけるのにどんなに苦勞があったかということが、体験ということの難しさとか新しさとか、体験というのをひとつのチャレンジのキーワードとしてきたと思うんですけど。グラバアさんのおっしゃっていたE I A Hのサイクルの中で体験が一番にくるところで、私もそういう感じがあるんです。そのあとの流れというのはおまかせすると言うとおかしいですが。おまかせというのは本人の人生に任せたりとか、あるいは自分の力を自分の目の範囲で、例えばこの授業の中の一コマでとか、この2年間の人関の中でという風にして見守るといことの方がむしろ、私たちが言う学ぶということになる。その人自身がその人自身になっていくということは、大きな意味での教育の仕事や人間観の仕事というのは、学習モデルでいうならば、何に任せてるのかということがいつも問われている。一人ひとりに。その人の成長や自分のその時の居方というのを何に任せたらいいかということをお各自が問われているテーマを今提供していただいたんじゃないかなと思いました。うまく言えませんが。だから体験し尽くすことのノウハウを人関として、それも大学教育のひとつの学科のあり方としてモデル化したり理論化したりというのは、私たちがそういう制約の中にいるから、チャンスとしてはあると思うししなければいけないと思うんです。だけれども、常に問われてるのは一体自分たちはどういう人間観を生きるか。今の、出会いとかかわりとか学ぶということに関して、どういう人間イメージを持っているのかということが最終的に問われているんじゃないかなと思いました。

中村：あと何か言い残したことなどは？

大塚：では。いつ言おうかと、まとまらないと思いながら。学ぶということが、一体どういうことなんだろうと思っていて。そこには何かどんなところにいる、方向性とか目指すものとか、価値観とか、どうしても付きまわってきて、何をもって学んだという風に言うんだろうというのが、ずっと私の中にあったんですけども。先ほどの山口先生のお話の考え方の中で、異質の方に持ち込むことが学ぶことだというひとつの見方ができて、それはすごく、なるほど！という風に思いました。で、そうなる津村先生がおっしゃったよ



うにどうやったら異質の方に持ち込めるかということになって、逆に学生と関わっていると、異質の層に持ち込むまいと必死になってるというか、同質にしがみつこうとして居る姿が分かる。その時に、まどか先生が言われた、何に任せるのかということを知って、その人の人生ということではおいておけないものを少し感じていて。たまたま今度卒業していった学生の中にも、彼女は卒業までにいろいろあったんですが、結局「私はこの学校は好きではなかったし、居たくなくて2年間がまんし続けてきた。こんなにがまんしたんだから、ご褒美として卒業できるのは当たり前だと思う。先生は、この先のあなたの人生とか言うけれども、私が今欲しいのは卒業したという資格が欲しいのであって、私の人生を云々と考える必要はないと思う。」と言って。それこそ人事を尽くして天命を待つしかないというか、私にできるのはそこまでということになるんですが。彼女は体験をした、異質のものと出会った、思いもかけないところに出会ってしまって否応なしにここに置かれてしまった体験をして、でも世界との関わり、人との関わりにおいては、これから起こるのかも知れませんがこの中では起こらないで、同質のところずっと生きていて、その時何ができたかなあと。何を彼女にしようとした時に、それも彼女の人生だ、彼女が行くんだからということと、でもやっぱり何かの方向に向けて働きかけるとしたらどういう方向で何に向かって何に照らし合わせて、ファシリテーターという言葉がありました、するのかなあと自分の中で関心として起こってきました。

グラバア：一言いい？私、あまり整理されてなくて来たので、うまく伝わってなかったのかなあとと思いますが。その「人事を尽くして天命を待つ」ということについて。学習理論、ああいうステップではない何かそこに体験熟していくそういう手助けとか、さっきひとつ言ったのは時間と空間ということですが、それは多分具体的になってくると単位の問題だとか評価の問題だとかになってくると思うんです。人間的な発想から言えば、25年間やってきた中に、それはこういうもんじゃないか、その人は熟すのを助けられるエッセンスにはこういうものあるんじゃないかというそういう手がかりのようなものを、我々一人ひとりが言語化できてないかも知れないけど、それこそ体験や関わりの中で何かプレイヤーというか、何か感じているものがあるんじゃないかと思うんです。やっていくことは、自分の枠に戻っちゃうかも知れないですけど、理論を提供するとかそういうところで足りないと言って戻ってくるんじゃないかと、その子の人生だと言いながら、でも何ができるんだろうという思いですよ。そこは、いわゆる思いや、思いよりも今は進めるときにきているんじゃないか、結晶化できるところにきているんじゃないかな。だから、そういうものを結晶化してあげたらいいかと、そういうことなんですよ。それが個人の思いや好意とか、その子に対する個人的な働きかけというのではなく、もっと、普遍化できる何かを探していきたい、結晶化していきたい、そんなことです。

中村：他には？



伊東：私は今日は、人間関係科のことを学ぼうと、生徒のような気持ちで来ました。先生方の話を聞いていて、私にとっては異質なものが飛び交ってくるというような感じですが。学び方って一体何なんだろうな、というのは私も思いました。ともすると、学び方というのをマニュアルみたいの方に行ってしまう、ひとつの型みたいなものを作って安定して、それに委ねてしまうことが起こりがちになって。それは学び方なのか一体何だろうか、というのが私の中でよく分からなかったところです。それから出会うというところで、私には出会うというのとはよく分からないんですが、ただ、他者に出会う、人に出会うというのは他者というのは、先ほども自分も他者ではないかという言葉があったんですけど、自分と出会うというものの出会いの中に入っているのか、もしそうであるなら、一体出会うというプロセスの中で自分と出会うのは、他者と出会うのと同じところで出会うのか、一体どこで自分というのと出会うんだろうかというのを考えながら聞いていました。で、私は割と他者との関わりというよりも、対象、ものとの関わりで自分を発見していくとか、概念とか、何かを作ったりという行為をして、体験をした後の目の前にできたものを見て、こんな私がいたとか、そういった自分の気づきをするところがあって。それがあからかも知れないですけど、自分との出会いというのはこの「出会い・かかわり」という中でどこに位置するのかなあと思いました。

中村：よろしいでしょうか。今回話題提供していただいたことによって、体験とは？経験とは？また、学び方のモデルのこととか、いろいろな触発があったかなと思っております。そういう意味で、これは南短発信のモデルを作るためにも今後またいろいろと考えていかないといけない問題がたくさんあったと思います。これで研究会を終わりたいと思います。



『出会い・かかわり・学び』—もうひとつの人間関係原論— (中野 清) 98.3.17

はじめに

人間関係科の学習の基礎的概念を検討するために、

「体験から学ぶ」……《体験》の重視の主眼は何か？

「学び方を学ぶ」……何を学ぶか？

人間関係原論という授業の今期のねらいは、

1. 124人と出会う…… (学生とスタッフ全員)

2. 自分をいかす、相手をいかす

今期のテーマ：かかわること と 学ぶこと をめぐって

ある日の授業 (97.10.2)：『学びの風景1』……中野の小講義 (学ぶとはどういうことか、中野の夏休み中の出来事を事例として、構造を説明する)

基礎概念の予備的な検討……コトバをめぐって

《教えるひと》と《学ぶひと》

「教」と「学」は、関係的なことばだ。

《体験》と《経験》

「体験」は、具体的・一回的・非反省的だ。／情意性・身体性を含む。(自己中心化の契機)

「経験」は、体験の主観的な偏狭さを打破するための知の反省的・自覚的契機を含む。(共同化の契機)

そのための「体験を読む」(了解 Verstehen・わかること)の必要。

cf. 独語の (Erleben) と (Erfahren) の違い

cf. デルタイの「生の哲学」Lebensphilosophie. 体験とは、人間の主体的な働きそのものであり、生と世界とが出会う根源的な場である。

体験とは、既知・既存の枠組みを突破してゆく行為である。

《かかわる》

拘わることへの、恐れ・不安・嫌悪……かかわりの受動性 (日本語のニュアンス)

みずから関わりを開いてゆくことはいかにして可能か？

《まなぶ》

まねること……学びの原像

「しつけ」という学び方……恒常的な変化、「身につける」

行動の変容にまでいたる学びはいかにして可能か？

《出会い》と《かかわり》と《学び》はどのようにつながってゆくか？……小講義より

—《学ぶ》とは、変貌すること—

体験～出会い……2種の出会い

出会いA：同質なものとの出会う。

既知・既存の思考の枠組み (尺度) のなかでの出来事。

知識・記憶の量的拡大を促す情報処理型。分析判断。(同等、対比、時空的接近の要素間の適合による明晰化の過程)

出会いB：異質なものとの出会う。「他者」と出会うこと。

「危機」の時。既存の枠組みのゆらぎ、解体と再構築の時。「発見」のとき。「イキイキする」とき。

知識の質的転換・行動変容を促す発見的な生の展開契機。

「思いもかけないこと」……偶然性

出会い～かかわりの変化

事例：世界とのかかわりの変化

事例：ひととのかかわりの変化

かかわり～学び

自覚化・主体化の必要

継続性・実行性の必要

おわりに

「体験から学ぶ」……

「学び方を学ぶ」……

